

12月2日 (金) 於・早稲田大学戸山キャンパス33号館3階第一会議室、Zoomミーティング
13:00~16:35 研究発表会
 「親」としての光源氏——親子関係をめぐる表現の諸相—— 新井 隆
 『今とりかへばや』と『在明の別』の邸宅——男君と左大臣に注目して—— 柿寄理恵子
 『更級日記』後冷泉朝記事の再考と橘仲俊 大塚 誠也
 江戸期における尚歯会の展開——テキストと図像の伝承と再生産を中心に 馮 辰鉞
 河村文鳳『帝都雅景一覽』二編(南北)の頼山陽の題画詩について 池澤 一郎

16:50~18:00 評議員会
12月3日 (土) 於・早稲田大学戸山キャンパス33号館3階第一会議室、Zoomミーティング
10:30~14:50 研究発表会
 志賀直哉「范の犯罪」論——法律としてのナイフ 李 喆兮
 坂口安吾「戦争と一人の女」論——ひきこもる男の自己回復—— 中尾志穂子
 渡辺啓助「盲目人魚」論——探偵小説における復員兵表象の内包 ベント勇亮ヘンリー
 大伴旅人における「型」の意識 李 満紅
 明治期沖縄の〈ローカル・カラー〉——伊波月城の言説を中心に 柳井 貴士
15:10~16:10 講演会
 鶴屋南北と直江重兵衛 古井戸秀夫
16:20~17:20 総会

※秋季大会は二日間にわたって開催します。各発表の開始時間等は日文コースのホームページ (<http://www.waseda.jp/bun-nihon-go-bun/autumn-conference.html>) をご確認ください。

※今年度は対面とオンラインのハイブリッド開催です。オンラインでの参加方法については裏面の「オンライン参加に関するご案内」をご覧ください。

「親」としての光源氏

——親子関係をめぐる表現の諸相——

新井 隆

長編物語の『源氏物語』には多くの人物が登場し、それぞれが関係しあう。物語内で描かれる関係は、恋、政治的關係、親子、友人など多様なものがある。特に幻巻までの物語において中心的に語られる光源氏に関しては、他者とのやりとりが多く描かれる。この光源氏と他の登場人物との関係について、従来の研究では恋または政治上の関係が多くとりあげられており、それらに関しては多角的な検討がなされて一定の成果があると言えよう。しかし、親子という観点、特に光源氏が親の立場になる場合については、研究の数も恋の關係などに比して少なく、また親としての光源氏の善し悪しを評価する研究に偏っており、「親」に関する表現そのものに斬り込んだ研究は乏しいように見られる。

本発表では、光源氏が親の立場にある場合について、「親」に関する表現がどのように使用されているか、玉鬘物語以前を中心にその様相を捉えていきたいと考えている。親のように庇護していた状況から夫婦となった紫の上との関係において「親」「父」という語が使われなくなることを通じ、関係の変化にともなう呼ばれ方が変わってくることを最初に確認していく。また、光源氏が後見役を務めた秋好中宮との関係においては、「親」に関する語である「親めく」「親がる」「親さま」などが使用される。これらの語と「親」という語の相違点を踏まえて、秋好中宮と光源氏との関係が「親」に関する表現からどのようなものとして読み取れるのか考えていく。さらに、実子の夕霧との関係において「親」「父」という語の使用例が少数であることの意味について考察する。その上で藤壺との密通により生まれた冷泉帝と光源氏の親子に関わる叙述において、「親」「父」という表現が明確には使用されないことを踏まえ、冷泉帝と光源氏の関係を親子という関係から捉えなおしていきたいと考えている。

『今とりかへばや』と『在明の別』の邸宅

——男君と左大臣に注目して——

柿寄理恵子

『今とりかへばや』の左大臣家の男君は内向的な性格で、周囲から姫君と扱われ、女装の尚侍として世に出る。しかし、巻三で自ら女装を解いてからは、左大臣家の継嗣にふさわしい存在に変貌してゆく。また、『今とりかへばや』から大きく影響を受け、男装の女君が家の問題を解決してゆく筋立ての『在明の別』には、男装の女君に探し出され、出生を伏せられ太政大臣家の継嗣として養育される左大臣が登場する。ともに次世代の家を担う男君と左大臣の、邸宅に関わる描写からは、両者の異なる造型と家の拡充の価値観が伺える。本発表は『今とりかへばや』と『在明の別』の邸宅をめぐる描写を分析し、二つの物語が描く継嗣の在り方とその差異を探る。

『今とりかへばや』巻三で、女装を解いた男君は、吉野の大君のために邸宅を造ることを思い立つ。完成した二条邸は、父左大臣がなしえなかった、共に住むのにふさわしい正妻を迎える邸宅になった。男君は左大臣家に有益な人間を二条邸に呼び集め、留めるために工夫を凝らす。二条邸で男宮を産んだ女君と、次世代を担う子供の存在は、二条邸に住まう男君の栄華を表す。対する『在明の別』の左大臣は、祖父であり養父でもある太政大臣の邸宅で暮らし、二人の妻の家に通うが、『今とりかへばや』の男君のような邸宅は造らない。また、太政大臣が大堰に隠棲した後、左大臣は太政大臣邸を十分に管理せず、邸宅には人気がない。大堰の太政大臣邸は美しく、人が集う場所、左大臣の住まう太政大臣邸との差は大きい。さらに、妹の中宮が帝の御子を懐妊した折、里下がりの支度を太政大臣と進めるが、左大臣は忙しなさに気分を悪くし、「あぢきなきまで」思われて自室に下がるなど、中宮の里下がりの重みを理解しているか疑わしい姿勢が目立つ。『在明の別』の左大臣は、太政大臣家の継嗣として『今とりかへばや』の男君ほど積極的に家の拡充を志向しない姿が見えてくるのである。

『更級日記』後冷泉朝記事の再考と橘仲俊

大塚 誠也

菅原孝標女作とされる『更級日記』後半には、後冷泉天皇即位に伴う大嘗会の御禊記事がある。日記作者が御禊見物をせずに初瀬参詣に向かう内容である。大嘗会は御代代わりを象徴する儀式であり、この記事は先行研究においても議論がある。

しかし、御代代わりに対する考察は、大嘗会の御禊記事への着目のみでよいのか。本発表は、御禊記事の直前に位置する石山寺記事が御代代わりと密接に関わることをまず指摘する。その上で、後冷泉朝記事始発といえる石山寺記事が、孝標女の男子橘仲俊を中心としていることを重要視し、後冷泉朝記事全体と仲俊の関わりを改めて究明する。

第一に、大嘗会の御禊記事が「そのかへる年」と書き出される点に着目する。時系列を指す「その」は、日記中で明確な用法を持つ。そして御禊記事の直前は「十一月の二十余日」の石山寺記事であり、後冷泉朝の始発は実は石山寺記事である。石山寺記事は内省的な文言を伴うが、その中心は「ふたばの人」仲俊等である。近年の研究は仲俊を閑却しがちだが、従来以上の究明を要する。

第二に、橘橋通の任国下向記事に着目する。俊通は仲俊を随伴して下向する。従来言及はないが、男子を随伴する下向は他資料にも散見される。例えば源道方、経信、俊頼の親子三代では、俊頼は任国の便宜まで図られた。俊通の仲俊随伴は、仲俊の出世を強く期待させるものではないか。孝標女は妾・後妻的な立場だったとも推測され、所生の仲俊が夫の後見をどの程度得られるかは喫緊の問題だったはずだ。

第三に、日記中の仲俊の描写と、その他の子世代の人物達の描写に着目する。日記では仲俊自身の人柄や言動は全く描写されない一方で、姪や甥との交流はたびたび描写される。姪甥は菅原氏の親族、仲俊は橘氏の親族であり、民族的な観点からも仲俊の描写が分析されうる。

これらの議論を通じて、『更級日記』後半の後冷泉朝記事の捉え直しと、仲俊の描写への新見を提示する。

江戸期における尚歯会の展開

——テキストと図像の伝承と再生産を中心に——

馮 辰鉞

白居易が創始した尚歯会(会昌五年)は元来七十歳以上の老人七人で開かれる、長寿を祝う詩会であった。『白氏文集』巻七十一(那波本による)には白居易与会の詩が収められ、会の様子を描いた障子絵も日本に伝わる。『本朝文粹』巻九、菅原是善の「暮春南亞相山莊尚歯会詩」ではその障子絵を観た南洲年名がいち早く日本初の尚歯会を催した経緯が綴られ、これは白居易尚歯会の僅か三十二年後の貞観十九年であった。その後日本では七回の尚歯会が開かれ、第五回の承安二年暮春白河尚歯会は漢詩会ではなく、初の和歌尚歯会となり、与会者の和歌と主催者藤原清輔の和歌序は「暮春白河尚歯会和歌并序」として多くの伝本が残る。建仁元年鳥羽殿尚歯会を最後に近世以前の尚歯会開催の記録が確認できなくなるが、江戸期になると再び盛んに行われたことは現存する多く資料から分かる。

また、室町期末から江戸初期にかけて、白居易尚歯会と七老の詩、「暮春白河尚歯会和歌并序」、並びに和漢両会を描いた絵画三者具有の絵巻が製作されたことは先行研究によって明らかであり、その内京都田中家蔵本を代表とする「白楽天尚歯会・暮春白河尚歯会和歌」画巻の抄写本が複数現存することも指摘されている。しかしその指摘より漏れた写本の現存が確認でき、その他に江戸期に催された尚歯会詩と尚歯会和歌の記録や、尚歯会の名のもとに製作された文学作品の関連書物は日本各地に散見し、その多くは調査がなされていない。

よって本発表では、(1)白居易尚歯会七老詩と暮春白河尚歯会和歌のテキストとその図像の伝播、(2)江戸期に催された尚歯会の記録、(3)尚歯会関連の文学作品、以上三つの視座から従来検討の及ばなかった諸本調査の成果もふまえ、現存する江戸期の尚歯会関連書物を紹介し、尚歯会テキストと図像の伝承と再生産の過程を考察する。その過程を通して、江戸期の文人活動における尚歯会の位置づけについて考察したい。

河村文鳳『帝都雅景一覽』二編(南北)の頼山陽の題画詩について

池澤 一郎

正岡子規の最晩年の随筆『病床六尺』二十二(新聞『日本』明治三十五年六月三日)の記事は、大阪の水落露石に贈呈された江戸後期の画人河村文鳳の『帝都雅景一覽』を繙き、曾遊の地である京都の実景と文鳳の描いた京都各所の景とを比較して、文鳳の画を「雅致」があり、かつ「真景」を「写生」していると評価する。この評価は文鳳の同時代人である頼山陽の「猶掣肘於寫貌未能大傾寫胸臆(猶ほ写貌に掣肘せられて、未だ大いに胸臆を傾写する能はず)」「(『文鳳山水遺稿序』)というものは対蹠的なものであった。

『帝都雅景一覽』は文化六年に刊行された初編上下二巻が京都の東西の名所旧跡の画譜であり、文化十三年刊行の二編上下二巻が南北の画譜となっている。漢詩文研究の立場から、この画譜を見る場合、各図に添えられている題画詩が、京都東西の景を収載した初編においては、小栗十洲の作に係る(西巻巻末の奥付による)ものだが、南北の巻たる二編においては頼山陽と岡田南涯との作に係る七言絶句が添えられていることが注目される。山陽は知られる通り、唐宋の詩文の中で、杜甫の系譜に連なる題画文学を大成させた北宋の蘇軾のものを酷愛し、自らも書画を嗜み、蒐集と鑑定とに憂き身を費した日本を代表する文人だからである。今回の発表では、『帝都雅景一覽』二編の文鳳の面に題された山陽の題画詩十首を解説し、山陽が文鳳の面をどのように読んで詩を案じ出したかを考察し、さらには山陽が「峯巒竹樹、開合変化して、情を恣にし筆を縦にす。能事を窮極す」と、『帝都雅景一覽』よりも一段高い評価を下した『文鳳山水画譜』の文鳳の面に自ら題した九首の題画詩とを比較し、幕末京阪の題画文学の特質を把握することを目指す。かつ、山陽の考えていた「写貌」と子規の「写生」とを比較対照して、正岡子規の「写生」概念について私見を呈示して、聊かなりとも専家の考察に資することが出来ればと願っている。

李 喆兮

短編小説「范の犯罪」は小説家志賀直哉の代表作の一つ、大正二年（一九一三年）十月一日に出版された雑誌『白樺』第四巻第十号に発表された。小説は奇術師の范が演芸中にナイフでその妻の頸動脈を切断したという不意な出来事から始まり、法廷の尋問で范とその妻の間にまつわる因縁の葛藤を徐々に明らかにしていく。裁判官はこの事件を過失による事故か、故意による殺人かと判断できなくなり、順番に目撃者の座長と助手、そして、范本人に質問した後、「無罪」の判決を出した。

小説は范が妻を殺すことから始まり、淡々と法廷裁判の全過程を描写してきた、即ち、裁判官が法律という大義名分で殺人の容疑を受けている范に対して裁判を行うことである。しかし、小説のタイトルは「裁判」ではなく、あくまでも「犯罪」である。つまり、表向きは裁判の進行を描写しているが見えるが、犯罪の進行と読むべきではないかと、小説のタイトルが示唆してくれている。とりもなおさず、范の犯罪は演芸の舞台で発生しているのではなく、法廷の上で発生している。范の使った凶器はナイフではなく、彼の証言である。

本発表では、范の訴える「情」と裁判官の代弁する「法」との言語によるせめぎ合いに着目し、真の犯罪は范の裁判官の尋問に対する答弁の中にあることを指摘する。この犯罪の全貌を説明するためには、法律の持つ自明の正当性に基づいた従来の読み方を見直し、裁判官と范の問答を「裁判」と「犯罪」の二重構造の中に置く必要がある。この二重構造は裁判官の法廷と范の舞台を重ね合わせ、范の妻に投げるナイフに「裁判」の象徴的意義を帯びさせ、裁判官の下した「無罪」判決にも一種の致命性を与える。そして、范が既存の裁判体制を打ち壊すことと、范と妻が「本統の生活」のために苦しみ苦しむことと、裁判官の感じた「何かしれぬ興奮」を読解することを手掛かりにし、「無罪」判決の背後に潜む法律の苦境の究明を試みる。

中尾志穂子

本発表では坂口安吾「戦争と一人の女」（『新生』一九四六年十月）を取りあげ、本作は東京大空襲前後から敗戦までの一組の男女の同棲生活を、男性の視点から回想する短編小説である。先行論においては、安吾が女性登場人物に不感症という性質を付与した最初の作品であることや、本作の姉妹編において初めて女性一人称を採用したこと、もっぱら「女」と呼ばれる女性に着目して論じられてきた。他方、これまでほぼ論じられることなかった主人公・野村の心理描写に焦点を当てて読むと、本作で一貫して繰り返される「女」への否定的言辭の中に、「女」と性的に遊ぶ他何もせずに敗戦の運命を甘受していた野村が、やがて戦争の継続を望むようになり、生への意志を持つようになる、という心情の変化が描かれていることがわかる。

この変化を、安吾が本作執筆直前に自身の自意識に起因する創作上の困難を述べていたことと接続させて検討すると、主人公・野村と安吾はともに頑強な肉体を持ちながら徴兵されていないという不可解な経歴を持っており、この両者の自意識に抵触すると考えられる背景が、作中で野村が「女」の不感症の否定に固執する行為の原因であると考えられる。さらに、この安吾の自意識が野村の無気力でひきこもりがちなる人物造形に影響を及ぼしていることを指摘し、斎藤環や芹沢俊介のひきこもり論を応用して野村の精神的な変化を分析する。

以上を踏まえ「戦争と一人の女」は、安吾の自意識の苦しみを負うことで引きこもることになってしまった主人公・野村が、不感症の「女」の肉体によって主体性を取り戻す、自己回復の物語と解釈し直した。そして戦後の安吾の創作活動において、野村の変化は、これまで女性に訪ねられるばかりだった男性主人公の言動が、本作を境にして意志を帯びるようになったという点で評価できると結論づけた。

李 満紅

『万葉集』は現存最古の和歌集と位置づけられるが、実際には「漢文」も多く採録されており、また「和歌」には「長歌」「短歌」「旋頭歌」など様々な「型」がある。さらに「漢文」と「和歌」を組み合わせて一つの作品が形成されている場合もある。万葉歌人がテーマや場にに応じて、いかに「型」を選択していったのかを究明することは、漢籍の影響を受けながら、独自の世界を拓いていった「日本」という国の文学史を問う上で欠かせない。

多くの「型」の作品が、多くの歌人たちによって生み出されたのが万葉第三期である。歌人の層が広がり、個性が開花した時代として和歌史上に位置づけられる。たとえば高橋虫麻呂は各地の伝説に取材した「長歌」を残し、山上憶良は漢籍の表現・発想を多く用いて、独特のテーマを「長歌」や「漢文」で綴り、「貧窮問答歌」や「沈痾自哀文」等を成した。中でも大伴旅人は特に「型」に拘った歌人である。漢籍の素養を十分に持ちながら「短歌」「長歌」「漢文」「漢詩」など様々な「型」を用いて、自らの文学世界を開拓した歌人である。二点ほど具体例を挙げる。①旅人は、吉野行幸に従駕して、旅人唯一の「漢詩」を『懷風藻』に、「長歌」を『万葉集』に残した。ただ『万葉集』の題詞によれば、「長歌」は「未奏上」であった。両作品には漢籍を享受した共通の構想が認められ、それが最終的に「長歌」を未奏上に終わらせた理由であったと考える。②藤原房前との間の琴の贈答をめぐる一連の作（漢文十短歌）がある。「漢文」が漢籍の書儀の規則に忠実であるのに対し、「短歌」には個人の情がこめられている。以上のように、旅人の文学的営みには「型」の選択があった。以上の二点の他、梅花の宴の「後に追和する梅の歌」の短歌四首などを含め、旅人における「型」の意識について考察する。

ベント勇亮（ヘンリー）

渡辺啓助「盲目人魚」は、一九四六年一〇月から同年十一月にかけて探偵小説雑誌『宝石』（前編・秋季特大号、一九四六年一〇月・後編・十一月号、一九四六年十一月）に「百枚讀切」として掲載された短編小説であり、復員兵のアイデンティティをめぐるアクチュアルな問題がいち早く「人間入れ替りのトリック」に取り入れられた作品の一つである。

これまで、渡辺の疎開経験と分身譚（いわゆるドッペルゲンガーの利用）への関心が色濃く反映された作品と指摘されてきた「盲目人魚」だが、作品の骨格となっている復員兵表象についての言及はほとんどなされておらず、「自明のもの」として見過ごされていることが窺える。これは、坂口安吾『復員兵事件』（一九四九）や横溝正史『犬神家の一族』（一九五〇）の影響によって、「探偵小説における復員兵の存在」妖異性を生み出す装置」という図式が固定されつつあることの象徴に他ならないといえよう。

そこで本発表では、「後続する」作品にみられる復員兵表象を単一的に付与するのではなく、「盲目人魚」という単体の作品における復員兵表象について検討する。特に、「種々雑多」な戦災者を抱える奥上州の温泉地を舞台とした「盲目人魚」では、前述の『復員兵事件』や『犬神家の一族』などにみられる「一家をめぐるカタストロフィーの象徴」としての復員兵像が機能していないという点に目を向け、敗戦直後の社会混乱の中の一つの現象として切り取られた復員兵像の性質について考察する。そして、それらの考察を踏まえ、復員兵の存在が探偵小説に内包されゆく過程を示した作品として「盲目人魚」を再定義し、敗戦直後の日本の言説空間の中に位置づけることを目指す。

柳井 貴士

本発表では明治期沖繩の批評家のひとりである伊波月城をとりあげる。伊波月城（本名・普成）は「沖繩学の父」伊波普猷の弟である。月城は、帝国主義的、同化的圧力のさらされた当時の沖繩において、大日本帝国の先にあるさらなる外部を意識した言説を展開した。また社会時事問題に言及しつつ、外国文学から摂取した（理想）を展開し、さらには沖繩における（文芸復興）を希求し続けていく。月城は一九〇九年に「誓閑寺時代の回顧」をもって『沖繩毎日新聞』での執筆を本格的に開始した。先行研究では、比屋根照夫がそれら記事を通して、「個人主義的・世界主義的志向の強い人間であり、宗教的倫理にもとづく内発的・内省的な人間」（『月城伊波普成小論』）だと評価しており、また仲程昌徳は月城の言論活動全体を俯瞰しながら分析している。

月城入社から二年後の一九一一年、中央文壇において沖繩出身の作家の小説が掲載された。山城正忠「九年母」であるが、月城は本作に否定的であった。本発表では、月城の（思想）の大枠を考察し、「九年母」批判への経緯と内容について考える。例えば、月城は正忠「九年母」の（ローカル・カラー）は認めつつも、そこに投影されるべき内面の不在を問うた。それは沖繩の風土を土台にした内面の自立、文化風土の個性がどのように表出すべきかの問いである。「花鳥風月」だけの詩歌を否定し、「革命的」である「文学」の登場を希求した月城の期待する「文学」とは、沖繩の個性に根ざした自律のための（革命的）作品であっただろう。一方、「九年母」は頑固党の敗北と、本土による象徴的な搾取という物語を持ち込み、抵抗や反意、状況への疑義を表出する者は描かれない。本発表では、以上の点を踏まえつつ、その言説に「琉球固有」を挙げる月城の沖繩の地方性とは何かを考察していく。

研究発表者紹介

新井 隆	大学院文学研究科博士後期課程1年
柿寄理恵子	大学院教育学研究科研究生
大塚 誠也	高知大学准教授
馮 辰鍼	大学院文学研究科修士課程2年
池澤 一郎	文学学術院教授
李 喆兮	大学院文学研究科博士後期課程3年
中尾志穂子	会員
ベント勇亮（ヘンリー）	大学院文学研究科修士課程2年
李 満紅	茨城大学助教
柳井 貴士	愛知淑徳大学講師

【オンライン参加に関するご案内】

- ・本年度の秋季大会は対面とオンライン併用のハイブリッド形式で開催いたします。
- ・オンラインでのご参加を希望される場合は、**11月30日(休)**までに下記のフォーム（URLかQRコード）よりお申し込みください。お申し込みいただいた方には、大会前日の12月1日(休)までに、事務局よりZoomミーティングや発表資料の情報についてご連絡いたします。

<https://forms.gle/J8KLWgxBUW9jh2W28>

*申し込みフォームには、日本語日本文学コースHP内「国文学会秋季大会」からもアクセスできます（下記のURL）。

<http://www.waseda.jp/bun-nihon-go-bun/autumn-conference.html>

- ・対面でご参加の方は事前登録の必要はございません。発表資料は会場で配布します。
- ・ご不明な点などありましたら、事務局（wkokubungakkai@gmail.com）までご連絡ください。

